

“MY TOWN” うおっちんで

# 歩 & 目 足 & ラテス

Vol.101

## 「八幡浜アーカイブズ写真展」 を振り返る

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
近代化遺産活用アドバイザー

当時、藤森照信氏（東大助教授）の建築探偵と



堀田建設社報「あけぼの」平成5年10月号



旧八幡浜繭糸売買所

という洋館解説の文章が一世を風靡し始めていて、それにとっても影響を受けたのだった。小さな会社とは言え、臆面も無く、パクリ？の表題をよく付けたものだど、振り返って全く汗顔の至りだが、やがてそれは私が退社するまで95回の連載となる隠れた人気コーナーとなった。

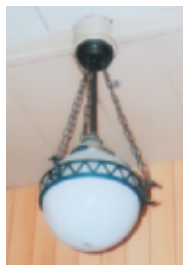
そのシリーズの第一回として最初に取材に訪れたのが、新港（現在は八幡浜市商工会議所や県八幡浜支局が建つ）に面してトロな風情を醸していたヒロタ商会の建物だった。本来の建物の名は「八幡浜繭糸売買所」。つまり、養蚕の成果物でもある繭糸の売買を業とする建物。

外観は洋風だが、コーナーに正面を取り、木造四階の望楼形式が辺りに異彩を放っていた。調べてみると昭和5年に竣工した事も判明。

当時の愛媛は西日本一の養蚕県で、特に

この周辺は大洲盆地、宇和盆地、鬼北盆地と何れも名だたる養蚕産地、それらの産物は主として八幡浜港から出荷され、その県下一の出荷量を誇る港がここだった。従って、内部はトラス架構の大屋根に支えられた大空間が広がり、きつと最盛期には各地から集散する繭糸の競りなども行われていたに違いない。

ところが、である。その貴重な歴史遺構が、あろうことが取材後一週間ほどだったか、まだ社報に掲載前、焼失してしまったのだ。世の中にはタマに想定外の事が起きるが、まさにこの時がそうだった。私は痛感した。「そうか、町は記録しておかないとこうして容易く変化し、何の前触れも無く失われるものなんだ」と。しかもタマサカで、取材時には埃まみれの予備の照明具があるのを屋根裏で見つけ、会社の方にお訊ねすると「いるなら持ってくるか？」と言われ、「じゃあ、ハイ。」と応えて



室内照明具



望楼四階の支輪天井



コーナー外壁意匠  
(洗い出し、磁器タイル、銅製桶)

そのまま頂戴したのだった。これとて、そのままなら滅失したものが、偶然とは言え私の手元に遺されるという不思議な展開。私はコレクターでは無いので、それらをマニアックに収集する立ち位置には居ない。ただそれ以降も、勤務先が建設会社という環境も含め、取材現場その他で、目前で廃棄されようとする様々な場面に遭遇することにもなり、ついッもったいない精神とでも言うべきか、手元にはその後色々なモノたちが集まるようになった。



レトロな外壁照明具(すずらん燈)

開催した私の写真展(2/23~25)では、八幡浜エリアにおける撮りだめた建築写真のみならず、前述の経緯で集めた、いや集まってしまった物証?の数々も一挙に併せて展示するという、きつとこれまでに無い風変わりな写真展となった。だからなのか、短時日の開催であったにも関わらず、約700名ほどの方々にご来場頂



賑わった会場の様子



復元展示された江戸岡小学校の長椅子

き、お陰様で会場は賑わった。それもこれも、八幡浜で開始したタウンツーリズム講座も通算で約20年、その受講生有志やガイド「八幡浜みてみんな」あるいは同級生による生け花が会場に色を添え、八幡浜高校地歴OBなど多くの方々を支えられた結果でもあった。この場を借りてお礼を申し上げます。また嬉しかったのは、会場のアチコチで会話の花も咲き、皆さんの滞在時間の長いこと。

私の生まれた町八幡浜は、周辺市町の中で唯一歴史資料館あるいは博物館が無い町。会場に来られた皆さんの反応を見る限り、皆が皆歴史に無関心とは言えない。さあ困った、また次の課題が見えて来てしまった。思えば、今の日本は全国で空き家が1千万件なのだという。トンだ先進国?日本である。あの未曾有の大難だった戦時中の空襲被害、あの被災家屋数でさえ約310万世帯と言われる。その焼け野が原から戦後の復興が始まり今に至るが、その3倍の数量が現在解体予備軍で、八幡浜のみならず地方ではもはや連日の解体ラッシュ。SDGs?、そんな夢物語は私の周辺には無い。アノ写真展から何人がそうした現状の危機感を受け取って帰ってくれたろう。